

杉並 づるる

つなぐ

ひろがる

ささえる

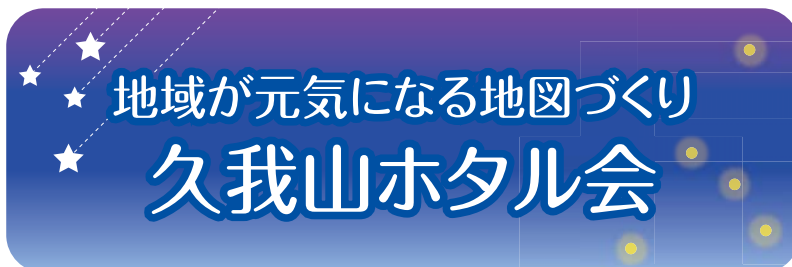
7

2018年2月発行

vol.

今号の主な内容

- 地域が元気になる地図づくり
—久我山ホタル会……………1～2面
- なみきおじさんの生活支援体制整備キーワード説明
—「中間支援組織って?」……………3面
- 生活支援サービス活動団体の紹介
—つながりがもてる居場所を「地域サロンフォーラム開催」……4面



「高齢者が外出したくなるような地図を作ろう!」。閉じこもりがちな高齢者を地域で支えていくために、久我山地域の有志が動き出しました。家に閉じこもりがちで地域とのつながりが少ない高齢者は、フレイル^{*1}へと進みやすく、必要とされる情報が届きづらいなど地域の課題でもあります。普通の地図にはないユニークなポイントを盛り込んだ、久我山ならではの地図が間もなく出来上がります。

★ 孤立しがちな高齢者に情報を届けたい



作成中の地図を紹介する大久保さん

このプロジェクトを進めているのは「久我山ホタル会」(以降ホタル会)。久我山を活動拠点としている医療・介護・福祉の事業所と町会、民生委員、NPO 法人、ケア24などで組織しており、地域の民間事業者が積極的に関与しているのが特徴です。

2016年に発足して以来、交流や講座など活発な活動を続けています。名前は久我山と言えばホタル。小さな灯りがひとつひとつ集まれば何かできるのでは、との思いから名づけました。ケア24久我山の久保憲和センター長は「2、3年前に関係者で集まった時に、民生委員から『地域で孤立している人、情報が入らない人がいる。地域の情報を届けられたら…』という話がありました。それが地図作りに発展しました」と説明します。



地図作りの打ち合わせ

★ 実地調査から様々なアイデアが

地図 (A1判) の対象エリアは、北は五日市街道から南の世田谷区北烏山の一部、東は富士見ヶ丘から西は三鷹市との境まで。エリアを7ブロックに分け、昨年8月から10月にかけて1ブロック当たり12、3人のメンバーで実地調査を行いました。地図上に何を載せるか。メンバーで調査の事前、事後に話し合います。町会がない宮前5丁目にある寺の住職で民生委員の立入聖堂さんは、「高齢者に地域情報を届けられない



さあ実地調査へ

か」と提案した人。実地調査の打ち合わせに寺を開放、自らも調査に参加しています。掲載される情報は、トイレ、ベンチ、公衆電話などはもちろん、ラジオ体操の場所や花見どころ、野菜の直売所など地域の魅力を紹介できるポイントも掲載。「脱水になりやすい高齢者には水分補給できる場所が大事」「道路状況などで歩きづらい道をわかりやすく」など実地調査から出た意見も取り入れました。富士見丘中学ボランティア部の生徒も調査に加わり、中学生の目線を見た意見も参考にしました。

地図には認知症サポーター養成講座*2を受講した事業所、商店（地元の信金、郵便局、カメラ店や喫茶店など）も掲載。「認知症サポーター オレンジロバのマークのいる店」としてオレンジのロバのマークで示しました。



★ 「交流」から ★ 「ホタル会の活動」へ

ホタル会をリードしているのは久我山地域の医療・介護・福祉分野の民間の事業者です。東日本大震災の直後から、地域の中核病院である久我山病院、薬局、介護サービスの事業者、ケア24、ゆうゆう館などが参加した交流会を年2回ほど開いています。参加者は徐々に広がり、今では50人ほど。交流会のメンバー「セコム暮らしのパートナー久我山」の奥村政彦主任は「生活の困り事相談に対応するためには、地域の関係する事業者と連携していくことが不可欠。交流会は『顔の見える関係』を作る場です」と話します。



「くがやま暮らし塾」

地図作りには地図情報会社(株)ゼンリンも協力しています。「地図をどう見せるか。専門会社にはそのノウハウがあります」

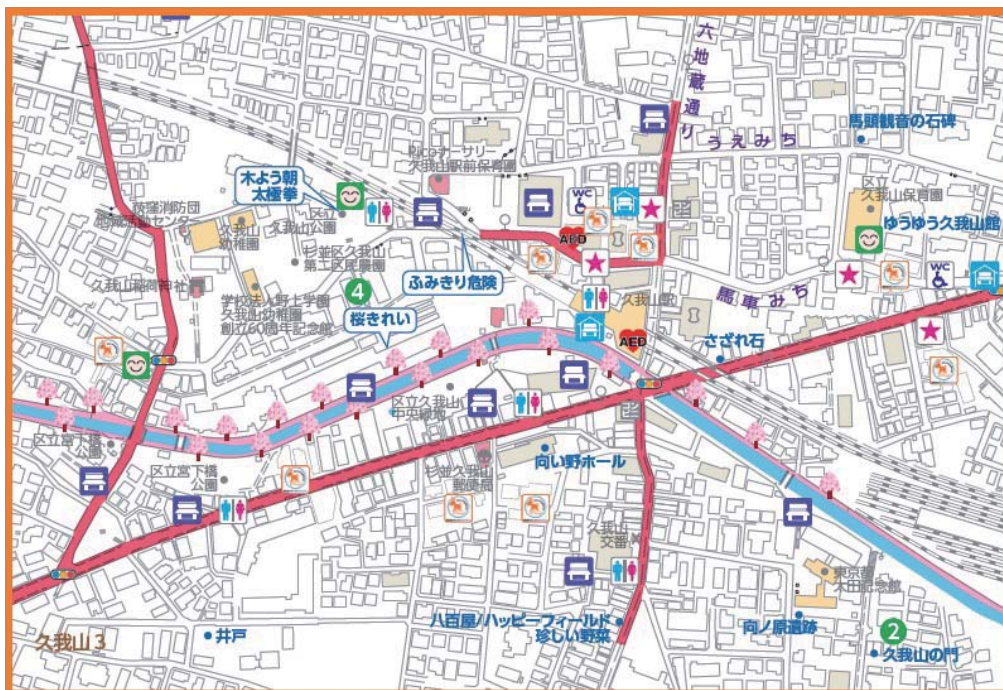
と奥村さん。この交流会の主要メンバーがホタル会の推進役になっています。ホタル会は地図作りと並行して「くがやま暮らし塾」という住民向けの講座を企画しています。認知症サポーター養成講座や福祉用具の選び方などをテーマに月1～2回、ゆうゆう館で開催しています。時には落語を使った困りごと講座などお楽しみ企画も。

★ 地図をきっかけに ★ 新たな取り組みへ

今年度は、杉並区のささえあい活動助成（長寿応援ファンド）*3を活用し、3,000部の地図を作製します。出来上がった地図をどう活用するか。まずは家に閉じこもりがちな高齢者らに民生委員や町会役員、ケア24などが無償で届けます。それだけでなく、地図を使ったウォークラリーや地域の人々が楽しく交流できるイベント企画、認知症の人が知らないうちに外出したことを想定した対応訓練など、アイデアが幾つか上がっています。地図を希望する地域住民には有償で提供する予定です。

ホタル会の主要メンバーでゆうゆう久我山館の運営を受託している NPO 法人「プロップ K」の石山恵子さんは、「地図を作って終わりではなく、地域づくりにつなげていきたい。」と。

ホタル会の「地域が元気になる取り組み」に期待が高まります。



出来上がった地図の一部

※1 フレイルとは、加齢に伴う心身の活力（筋力、認知機能、社会とのつながり）が低下した状態を言います。多くの人が健康な状態からこのフレイルの段階を経て、要介護状態に陥ると考えられています。

※2 認知症サポーター養成講座とは、認知症について正しい知識と理解を持ち、地域で認知症の人やその家族に対してできる範囲で手助けする「認知症サポーター」を養成する講座です。認知症サポーター養成講座は、地域住民、金融機関やスーパーマーケットの従業員、小学生など様々な方に受講いただいています。

※3 ささえあい活動助成（長寿応援ファンド）とは、地域貢献活動やいきがい活動などに参加した皆様からの寄付を原資とした助成金です。地域に貢献する公益的な活動の助成や公共用具の設置を行っています。

今号のキーワード

「中間支援組織って？」



NPOの人に「中間支援組織」って言葉を聞いたんだけど、何をするとところなの？

「中間支援組織」に明確な定義はないが、地域のNPO法人の育成や地域のネットワークづくりなどを目的に活動している団体じゃ。杉並で代表的な団体は「すぎなみ協働プラザ」*じゃな。



具体的な活動は？

「すぎなみ協働プラザ」では、NPO法人などに対し様々な支援を行っている。団体設立時やその後の運営に関する助言、各団体間のネットワークの促進、人材や情報などの資源提供者と団体との仲介、広報の支援などじゃ。NPO法人だけでなくボランティア団体、社団法人、企業、個人、町会、商店街など地域活動をされる様々な方の相談にも関わっているそうじゃ。



規模が小さな団体、始めたばかりの団体、これから活動を始めようとする人にとって、情報や他の団体とのつながりはとても大事だよな。地域で活動する人たちには頼りになるところだね。



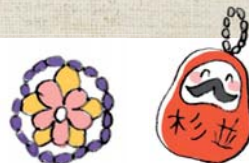
すぎなみ協働プラザから「杉並NPOガイドブック2018」が発行されました。地域活動に興味をお持ちの皆様、ぜひお手に取ってみてください。魅力ある活動がたくさん掲載されていますよ。



【注釈】「すぎなみ協働プラザ」は「NPO法人CBすぎなみプラス」が杉並区より委託を受け運営しています。



つながりがもてる居場所を 地域サロンフォーラム開催



永福和泉地域区民センター協議会は昨年11月29日、地域の多彩なサロンの活動を広く紹介する「地域サロンフォーラム」を同センターで開催しました。フォーラムでは講演・シンポジウムとサロンの展示コーナーが設けられ、関係者や地域住民243人が来場しました。区内には「きずなサロン」をはじめ多くのサロンが開設されていますが、高齢者の一人暮らしが増え、近所付き合いが少なくなっている中、「身近な地域に仲間がほしい」「地域とつながりたい」と集いの場を求める声は大きくなっています。フォーラムを通じてまず「地域サロン」の存在を知ってもらおうと企画されました。



▲杉並区社会福祉協議会 中島篤さん

“心の居場所”の意義も

フォーラムは同センター協議会と杉並区社会福祉協議会、浜田山・堀ノ内・永福・方南の4つのケア24（地域包括支援センター）との協働事業として開催。基調講演では『いま地域サロンに求められるもの』をテーマに、杉並区社会福祉協議会の中島篤さんが「サロンには“心の居場所”としての意義が大きい。誰でも出入り自由な、ゆるやかにつながる居場所が求められている」と話し、徒歩で通える生活圏域にサロンが必要なことを訴えました。

続くパネルディスカッション「『地域サロン』ってこんな場所！」では、永福和泉地域の4つのサロンの運営者、利用者、ケア24職員がパネリストになり、それぞれに違う開設の経緯や活動の実際を語り合いました。商店街活性化を目的の一つとしながら、商店街から独立した任意団体として活動することで、枠にとられない自由なネットワークが生まれているという「いずみっこまち倶楽部」、活動の場を特別養護老人ホームに移し、調理イベントでは高校の家庭科室を借りることで、世代を超えた多彩な地域交流を育んでいる「きずなサロンさくら」、障害者と健常者が自由に交流できる場に発展させたいと夢を語る「方南和泉きずなサロン峰」、晩酌付きの夕食会で介護者に息抜き場の場を提供する「晩めし屋」。中島さんが「サロンの魅力はそれぞれの文化があること」と指摘するように、サロンごとに個性が紹介されました。パネリストで「晩めし屋」利用者の牧野資繁さんは「行けば、みんなが暖かく迎えてくれる。孤独感やストレスが解消される」と、サロンの意義を語りました。



▲サロンについてそれぞれの立場で語るパネリスト

参加者、運営者が交流

展示コーナーには、同地域でサロンを運営する14団体が参加。サロン利用者らが制作した手芸品や人形、書道作品などを飾ったり、写真で活動の様子を紹介したり、工夫を凝らしたブースが並びました。来場者が会場を埋め尽くすほどのにぎわいで、活気に満ちた交流が行われました。主催した同センター協議会事務局長の樋口拓哉さんは「サロン運営者同士が情報交換をして、親睦を深めてほしい」と話しています。

今回のフォーラムでは、新しくサロンの開設を考えている人に向けた、立ち上げに関する説明会も行われました。開設・運営に関する社会福祉協議会の支援等の説明に、参加者は熱心に耳を傾けていました。地域の居場所がまた増えるかもしれません。



▲サロンの展示コーナー